

京都市教育学講座3

「実践発表 子どもを豊かに育む教育」

東山泉小中学校 教諭 則武 千裕（5年担任）

【はじめに】

私は、京都教師塾1期生として、たくさんの方の事を学ばせてもらいました。今回、何かお返しができるか、と思って、発表させてもらいます。私が、毎年一番大切にしているのは最初の3日間です。子どもたちの一年がこの3日間にかかっていると言っても過言ではないと思っています。子どもたちが「今年の先生は楽しそうだな」「このクラスは面白そう」「しっかり学習しよう」と感じられるように3日間の計画を綿密に立てるようにしています。

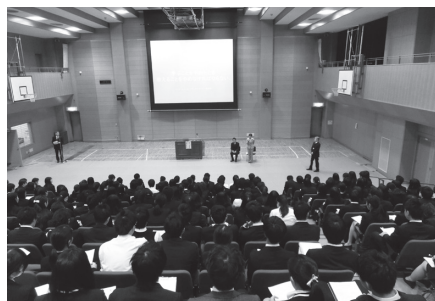
【学級経営の中で大切にしていること】

学級経営の中で大切にしていることを話します。1つ目は学級目標です。日々、学級目標を意識しながら学級を経営することになります。3月には、達成できたかどうかを振り返ります。私は子どもたちに「どんな学級にしたいか3日後聞くから、3日間のうちに考えといてね」と学級目標を考えさせています。子どもたちの思いに加えて、教師の思いも入れるようにしています。学級目標の達成に向けての一人一人の目標も書かせて、学級目標の横に掲示しています。

2つ目は、ポイントを押さえることです。

例えば、4月当初の1週間の指導では、教室に来たら何をするのかについて細かく伝ええます。「まず宿題を出す。そしてランドセルを片付ける。次に名札を付ける。それができてから遊びに行くんだよ」と言います。そして、一か月後に継続してできているかどうかをきっちり確認します。

最初のチャイムが鳴ったら朝学習がスタートします。朝学習は子どもたちだけの学習になることが多いです。教師がいない中で子どもたちの様子は学級の状態を見極める一つの目安と感じています。子どもたちがどれだけ静かにできているのか、時には教室の後ろからのぞき見ることもあります。このようにポイントポイントできっちりできているか確認し、必要があれば指導します。



3つ目は、たくさんほめることです。ほめるときに、子どもたちが理解しやすいように、ほめることができる場面を写真で撮るようにしています。朝学習も「静かにできていたね」「きちっとできていたね」だけでなく、写真を見せながら「ほら、こういう姿が素敵」「これが5年生として素晴らしい姿だよ」と伝えています。他には一人一人の良さ、課題をノートに書きとめていくようにしています。そして一人一人の良さを見つけ伝え、また課題も知りながらそれを達成できるように伝えることを意識しています。ほめてばかりではなく、時には厳しい一面も見せる必要があります。ここぞと思った時には厳しく叱れる先生であってほしいです。

4つ目は授業を大切にすることです。子どもたちにとって、学校生活の多くは授業です。授業が楽しくないと学校が楽しくなりません。授業が楽しい、と思えるように工夫するようにしています。子どもが板書しながら発表したり、体験的に実感できることをしたりするなど、授業の一つ一つを大切にすることを心がけています。また、一年間通して行うこととして、学級通信があります。私は週に2回・年100号を目指しています。最後は、1冊の本になるように、子どもたちにためさせて、1年の最後

に振り返りとして活用しています。

【最後に】

現場に立ち、京都教師塾で勉強になったと思うことの一つはたくさんのお話し合いをしたことです。いろんな人の考えに出会うことは、教師の幅を広げることになります。このような機会を是非、大切にしながら学んでほしいです。そして、学ぶ意欲を持ち続けてください。



京都市教育学講座3

「実践発表 子どもを豊かに育む教育」

伏見中学校 教諭 加藤 真也（2年学年主任）

【当たり前のことを当たり前】

自分自身が心がけていることを3つ紹介します。一つ目は、当り前のことを当たり前にするのを心がけています。具体的に言いますと、挨拶、時間を守ること、連絡、リアクション・レスポンスです。保護者や生徒からのアンケートで「挨拶しない先生がいる」と書かれていたことがありました。生徒たちに「きちっと挨拶をしない」と言います。当たり前にならなければならないと思う反面、生徒からの挨拶に対して、自分自身が挨拶に気づき、元氣よく挨拶を返しているのか、と考えたときに、改めて、きちっと挨拶をしないといけないと思いました。教師自身が時間を管理できてない姿を見せると生徒は時間を守らなくなります。時間をしっかり意識し、守ります。もし何かの事情でできないことがあっても、その事情を説明し「ごめん」と謝罪し、守っていこうとする姿勢を見せることが大事です。次に、連絡、リアクション・レスポンスについてです。様々な場面で、一日ぐらい遅れても大丈夫だろうと甘えてルーズにしていくと、生徒、保護者との対応のときにも、その姿勢が出てしまいます。連絡は確実にします。期限は守ります。期限に遅れる場合は理由を言うことを

心がけています。これは、保護者、生徒と信頼関係を築くために必要なことです。

【スタイルを磨く】

心がけていることの2つ目は、スタイルを磨くことです。「スタイルとは何か」ということは、明治大学の齋藤孝教授が著書の中に示されています。教師のスタイルとして定義すると「基礎となるものを身に付けたうえで、自分の教育観・信念・身体性といったものに、技や工夫を掛け合わせたもの」になります。「あの先生はスタイルを持って授業されている」「あの先生のスタイルを真似したい」という言葉で表現される「スタイル」のことです。スタイルが身に付くためには、「基礎となる力」が一番重要です。基礎となる力をおろそかにして「自分



の信念はこうだ！」と言っても、スタイルとして伝わらないです。教師を志した段階で、技や工夫に走るのではなく、教科指導に関わる知識などの基礎となる力をしっかり伸ばし、土台を作っていくことが今後スタイルをつくっていく大きな柱となっていくと思います。基礎となる力なしにスタイルは作られません。

スタイルを磨いていく機会として、齋藤孝教授の話によると「スタイル間コミュニケーション」があります。スタイル間コミュニケーションとは、「互いの関わり合いの中で、互いがスタイルを磨いていく」ことです。学校にはスタイルを磨く場がたくさんあります。保護者からもスタイルを学び、磨くことができます。保護者には子育てのスタイルがあります。子どもにどう関わっておられるのかということから学ぶべきこともあります。保護者のクレームの中には、「学校・先生に対して期待しているもの」「自分ができていなかったことを指摘してもらっているもの」が多いです。「うるさいな」「きつく責められた」と思うことも、どんなスタイルで子どもと日頃は関わっておられるのかを考えることで、クレームと思えるようなことも自分のスタイルを磨くことにつながります。



【アンテナを張る】

心がけていることの3つ目は、アンテナを張ることです。アンテナはいろんなところで働かさないといけません。「何かつかめるものがある」と思いながら生徒の動きに対してアンテナを張っています。職員室内での周りの先生の会話にもいろんな情報が詰まっています。新聞・本・ネットにも常にアンテナを張っています。面白い記事があればスマートフォンのカメラで撮っています。「今後使えそう」「面白い」と思ったものは記録に残しておき、いつでも引き出せる状態にしています。学校以外の人にもアンテナを張ることは大事です。はじめのうちは、集めた情報が、なかなか実践の場に生かれないと思いますが、教師としての経験が増えてくると、それにつながるスピードが上がってきます。今は、「おかしいな?」「面白いな」と思うものを見つけ、自分のものにしていってください。それが実践の場につながっていきます。私は、アンテナを張り、さらに、そのアンテナを磨くことを意識して日頃生活をしています。

【最後に】

“学ぶことをやめたとき教えることをやめなければならない”。これはフランスのサッカーの指導者が言ったことです。本日の発表も学ぶ機会をいただいたと考え、準備し、話をさせてもらいました。これからいろんな人からいろんなことを学んでいく姿勢を忘れずに教師をやっていきたいと思っています。

【塾生レポート】 受講して学んだこと

1 全体会

全体会では「子どもを豊かに育む教育」というテーマに、お二人の教育実践の内容や、学校生活運営で心がけていらっしゃることをお聞きした。その中で私が学んだことは、大きく分けて3つある。1つ目は、子どもたちと信頼関係を築くためにはほめることも大切だが、時には厳しく指導することも大切であるということだ。教師は、指導者である以上、生徒のよりよい未来を見据えて生徒と向き合うことが必要不可欠である。そのために生徒のことを本気で思いやり、厳しく指導することが大切なのだと感じた。また、同時にその厳しさがあるからこそ、ほめることの意味や効果があるのだということが分かった。2つ目は教師という職業は失敗がつきものであるということだ。教師も人間であり、生徒とともに学んでいくため、常に失敗は生じていく。私はお二人のお話から、その失敗をどのように活かしていくのかが一番大切なことなのだと思ふことができた。そして失敗してしまったときには、素直に謝り、それまでの自分自身の誠意を示すことが、生徒と教師の信頼につながるのだと感じた。3つ目は、全ての経験が実践で生きていくということだ。加藤先生が「経験によって、つながるスピードが上がる」と言っておられた。このことから考えたことは、多くの経験で広がったコミュニティが、新たなアンテナを張り巡らせる場となり、そこで得たことが引き出しとなって実践で生きていくということだ。それが重なることで学びのスピードは上がっていく。この言葉から、経験がどのようにして自分の力として生きていくのかが明確になった。

2 分散会

今回全員で一致したことが、教員になったら「学級通信 100号」まで発行したいというものだった。みんな生徒と向き合い、よりよい学級作りをしたいと思う気持ちは同じだなと思った。

3 まとめ

お二人の話聞いて感じたのが、教師には人を引き付ける力が必要であるということだ。その方法は人それぞれ違い、どのようなことが生徒の関心を引くのかについて、今後の実地研修で学びたいと思った。

コメント

「本気でほめる、叱る」ことや「人としての誠意」「経験を自分の力に」など、意欲的な学びの姿勢が伝わってきます。実地の経験を通して、さらに学びを深めましょう。



教育実践特別公開講座3

「児童虐待の現状とSSW」

生徒指導課子ども支援専門官・指導主事 土井 則夫

【講師からのメッセージ】

「児童虐待とは何か」といった基本的な内容から、児童虐待の現状と課題について考えていきます。また「SSW（スクールソーシャルワーカー）」とは何か、SSWはどのような役割を担っているか、共に考えてみましょう。

【はじめに】

あなたはどのように考えますか。

- 授業中でも空想の世界に入り込んでしまう。
- 先生から叱られたりすると目がうつろになり、あくびをしたり、意識がもうろうとしてくる。
- 今までにこにこしていたかと思うと、突然目つきが変わるなど人格状態が急激

に変化することがしばしばある。

- パニックになるような状況ではないのに、突然パニックになる。
- 一週間に何度か「眠い、しんどい」といって保健室にくる。ベッドでぐっすり眠っている。
- 一人でも平気、いじめられても無抵抗、自分を抑え込む。
- 表面的な社交性、相手構わぬなれなれしさ、相手に対する感情表現が不安定。
- 自分の言動を社会的に適切な範囲で調整できない。

発達障害の場合もありますが、これは虐待の可能性もあります。虐待とは、家庭内の大人から子どもへの不適切な力の行使です。親だけではなく、大人からの行使です。小さい頃に虐待を受ければ、脳の成長に問題が起きることが医学的にも実証されています。また、暴力を慢性的に受け続けるなど、恐怖に駆られた日々を生き抜くために、「怖い」とか「痛い」といった感情や感覚を麻痺させる心の対処法を身につけてしまうことがあります。



【虐待の種類】

よく聞きませんか？子どもに手をあげている人が「これはしつけど」と言っています。学校現場に行くことになれば、こんな言葉を聞くことがあると思います。しつけどは「何をしたら褒められ、何をしたら罰せられるか」を子どもが理解し予測できます。例えば家庭で「これだけは大事にして」と言われたことはありませんか。これを破ったら叱られたという経験もあったと思います。したがって、大人の気分や理解しがたい理由で罰せられるのはしつけどではなく、虐待です。

虐待は大きく分けて、①身体的虐待、②ネグレクト（保護の怠慢）、③心理的虐待、④性的虐待の4つに分かれます。

「身体的虐待」は、あざができたりして学校の先生が一番気づきやすいです。

「ネグレクト」は数種類あります。子どもを嫌い、世話をしない「積極的ネグレクト」、特に子どもを嫌っているわけではないが養育能力に問題があり、結果として十分な世話ができていない「消極的ネグレクト」、その他に病気の治療を受けさせない「メディカルネグレクト」などがあります。

「心理的虐待」は、言葉による脅迫や、子どもを無視する、子どもに拒否的な態度を示すものです。

「性的虐待」は、子どもへの性交、性的暴行などです。また、子どもをポルノグラフィの被写体に強要することも性的虐待です。性的虐待は非常にわかりにくい面があります。「私だけで解決しよう」ではなく、すぐ管理職に相談してください。子どもの訴えについては本当に丁寧に対応しないとけません。



受付の様子

【児童相談所】

児童相談所は、18歳未満の子どもを対象に、子どもの福祉を図るとともに、その権利を擁護することを主たる目的としています。「189」が何の番号か知っていますか。189（いち早く）が児童相談所の全国共通ダイヤルとなります。どこから189に電話しても児童相談所にかかります。これは児童虐待をなくし、子どもたちの笑顔を守るということで覚えやすい3ケタの番号になりました。京都市の児童相談所での虐待対応件数は、平成26年度は1372件あり、約10年前と比べ2倍以上増えています。そのうち、虐待認定したのは951件です。

知っておいた方がいいのは「性格行動相談」です。子どもの人格の発達上問題となる反抗、友達と遊べない、落ち着きがない、内気、緘黙（かんもく）、不活発、家庭内暴力、生活習慣の著しい逸脱等の性格もしくは行動上の問題を有する子どもに関する相談に応じてもらえます。ただ、学校が児童相談所に「A君を性格行動相談にかけたい」と言っても受けてもらえません。親権者である父・母・祖父母等から児童相談所に相談をかけないといけません。しかし、子育てに困っている家庭は、「電話をしてください」とだけ言っても難しいです。先生は関係機関と家庭をつなぐ役割を果たすことが求められています。

虐待に関する新聞記事で「関係機関は何もしなかった」という内容が書かれることがあります。学校にはいろいろな個人情報がありますが、虐待通告義務は、守秘義務を上回ります。なお、通告の秘匿が原則ですので、誰から通告があったのかということとはわからないようになっていきます。

【心の発達課題】

乳児期には乳児期の発達課題があり、基本的信頼感を獲得します。養育者に近づいて安心を得ようとします。小さいときに愛着行動が形成されなかったら、後々、愛着障害が起こり、その後の発達課題の獲得を妨げます。幼児期になると自律性を獲得していきます。児童期では、積極性、自主性を獲得し、なんでも自分でしたがりです。学童期では、勤勉性を獲得します。大事な観点は、「育ちなおし」です。初期の発達課題の獲得が不十分であっても、その発達課題を取り戻すことは可能です。子どもの実態を見て必要であればどんどん手立てを打っていかないといけません。学校が家庭の役割を担う部分もたくさん出てきますので、いろんな背景を知ったうえで子ども、その家庭に関わっていくことが大事です。

【スクールソーシャルワーカー】

虐待、発達障害、家庭の貧困など、福祉



午前の講義終了後の休憩時間

的な視点を必要とする問題が多くなってきています。スクールソーシャルワーカー（SSW）は、これら子どもの家庭環境による問題に対処するため、児童相談所と連携したり、教員を支援したりする福祉の専門家です。

子どもの問題解決を支援する職種にスクールカウンセラー（SC）があります。SCは心理の専門家であり、児童生徒の心理面を理解することで、子ども自身のより良い適応や人格発達を促します。一方、SSWは、子どもを取り巻く環境の改善を目指すので、支援のアプローチが大きく異なります。

一つ事例です。

- A君は小学校3年生の児童。
- 授業中に落ち着きがなく、じっと席に座ってられない。
- クラスメイトに暴言を吐いたり暴力をふるったりすることがある。
- 担任の教師に対しても非常に反抗的である。
- 学力はかなり低い。

みなさんも教員になって学級担任になればこういう子と必ず出会います。先生の関わりは、次のとおりです。

- A君に指導します。
- A君の自制を促して規範意識の高まりや行動の変容を目指します。
- 保護者と話します。

そして、指導・支援は継続していく必要があります。

SCの関わりは、次のとおりです。

- A君へカウンセリングします。傾聴して寄り添います。A君の内面的なことを解決しようと支援します。

- A君の保護者へカウンセリングします。
- 担任の先生へコンサルテーションします。心理面での支援を一緒に考えていきます。

SSWは、児童相談所などと連携します。児童相談所と家庭がつながることが難しい場合、福祉の視点で改善策を考えていきます。そのためのSSWの支援の流れは、情報収集し、集約の上、アセスメント（見立て）します。アセスメントをもとに、学校と連携し、誰がどのような役割を担うのか計画を立てます。そして、このサイクルを繰り返します。いろいろな情報が出てくるので、一括管理する「アセスメントシート」が必要になってきます。このシートを見て、該当の子どもの状況を把握し、ケース会議等を行います。情報を共有して、誰がどんな支援を行っていくのか考えていくこととなります。

「アセスメントシート」の利点として、「多くの情報の関連性がわかる」「どういう情報が足りないかわかる」「情報の共有が容易」「いいところを見つけやすい」などがあり、結果プランニングにつながりやすくなります。「アセスメントシート」を最初から全部埋めることが狙いではありません。持っている情報を一枚で整理できるので、足りない情報に対しては、「家庭訪問に行った時ここのところを聞かないと…」「母親と会う時こうしないと…」ということを考えていくことができます。新たな情報は、「アセスメントシート」に追記し、そして、情報を共有します。

【まとめ】

SSWは、学校でのソーシャルワーク的支援を促す黒子であり、「こんな情報を基に



DVD 視聴の様子

こういうふうにしたらいいですよ」と支援します。また、発達障害・児童虐待等の子どもに関することや児童福祉に関する専門的知識を持ち、教員へのアドバイザーにもなります。SSWとSCが一緒の日に勤務して情報共有している学校も多くあります。SSWは、SCや関係機関を社会的資源ととらえ、そこへ「つなぐ」役割を担っています。

学校に勤めるようになれば教育の部分だけでできないこともたくさんあります。大事なことは「この子どもを何とかしないといけない」という視点でいろんな人が知恵を合わせて活動していくことです。いろいろな問題に直面するかと思いますが、しっかりと向き合ってください。根本は命を守ること。教師は、やりがいも責任もある仕事です。

京都市教育学講座 4

「先生をめざす塾生に期待すること

～保護者の立場から～

パネリスト

- 保護者 A氏（小学生の保護者代表・父親）
- 保護者 B氏（中学生の保護者代表・母親）

堂上（コーディネーター）

「先生をめざす塾生に期待すること～保護者の立場から～」をテーマとしてパネルディスカッションを行います。本日は、公立学校に子どもを通わせる保護者にお越しいただきました。お二方ともにPTA活動にも熱心に取り組まれておられます。

保護者の視点からのお話を聞いていただき、保護者の思いを受け止められる教員になるために、自分はどのようにするべきかを考える機会としてください。

【入学、進学するにあたって保護者として願っていること】

Bさん

学校は社会に出るための準備段階をする場所だと思っているので、集団生活の中で、社会のルールやマナーを身につけてほしいです。また、素敵な先生・友達と出会い、本当に楽しかったという温かい思い出を作ってくれる場所であってほしいと願っています。

Aさん

子どもが楽しく学校に行ってくれることが一番の願いです。そして、友達や信頼できる先生と出会って何か打ち込めるものを

見つけてほしいです。自分の子どもたちは、学校で勉強以外にも打ち込めることを見つけてくれたので、本当に嬉しかったです。

【印象に深く残っている出来事について】

Aさん

長女が小学校4年生の時、一時、急に学校に行けなくなりました。理由ですが、担任の先生は、厳しく、特に忘れ物に関してはしっかり指導されていました。長女は、他の子どもが忘れ物をして叱られている様子を見聞きすることがとても怖かったようです。朝、何度も忘れ物がないか確認していると、集団登校の時間になり、泣いていました。

その時、担任の先生は、毎朝家まで来て話を聞いてくれました。先生が来てくれて「怖くない」と、子ども自身がわかってくれたから学校へ行けるようになったと思います。本当に親身になって子どものことを考えていただけたこと、先生の顔を見て話ができたと心強く感じ、印象に残っています。

Bさん

長男は小学校の入学式以後、叱られてばかりの1・2年生でした。毎日のように学

校から「今日もこんなよくないことがありました」と電話がありました。私は長男の悪いところばかり見るようになっていました。

3年生になり、出会った担任の先生は「お母さん、よくないところはたくさんあるけど、彼のいいところ一緒に見つけよう」と言われました。「こんないいところがある」「こんなことを今日は頑張っていた」と電話もありました。私が「先生より先にいいところを見つけよう」と思うようになると、長男の行動がだんだん変わってきました。

悪いことをする原因は長男だけにあるのではなく、マイナスの見方が影響し、子どもをよくない方向に育ててしまっていることに気づかせてもらいました。学校でも、先生が「悪い子や」と言っていると、子どもたちもそのように見るようになり、悪循環になってしまいます。先生がクラスで長男のいいところの話をしていただいたので、それを聞いた子どもたちの長男に対するイメージは良い方向に変わっていったと思います。

もう一人は養護の先生です。長女は、高学年になると、学校での嫌なこと、辛いことを養護の先生に話をしていたらしいです。ある時、養護の先生が私に「今、こういう状況で子どもは困っているけれども、それを乗り越えようとしています。手出しをしてはいけません。だから、お母さんの胸にしまっておいてください。何かあれば、伝えます」と言っていただきました。子どもの心の成長に寄り添ったアドバイスでした。長女にとって養護の先生の存在はとても大きかったし、本当に出会えてよかったと思っています。

【PTA活動を通して感じられていること】

Aさん

学校の門前に立ち、暑い日も、寒い日もPTAが挨拶運動をしている中、先生はその横を通って行かれます。きちっと挨拶ができること、「ありがとうございます」と言えること、そして、その時に何を感じられているかということがとても大事だと思います。学校に関わっている人に対して、アンテナを張り、先生の視野を広げていただきたいです。いろいろなつながりができ、学びが深まるケースもあるのではないかと思います。

【PTA活動をしながら学校教育に関わってよかったこと】

Aさん

毎朝、見守り隊として通学路を歩いています。子どもたちに出会うと「おはよう！」と挨拶を交わしています。子どもも私のことを覚えてくれて「会長おはよう！」と言ってくれます。子どもたちが本当に友達のようになり、子どもたちから「今日こんなことあって…」「昨日こんなことあって…」と話してもらえるようになりました。子どもは楽しそうに話をしますし、私にとっても、とても元気をもらえるので、これからもずっと続けていきたいと思っています。



Bさん

私は小学校でずっと読み聞かせのボランティアをさせてもらっています。Aさんと同じような感じで、子どもたちとの関係がとて近くなれたことがとてもよかったです。

また、PTAをしていると、いろいろな先生と話をすることができます。先生とのコミュニケーションを通して、先生が細心の注意を払い、子どもたちの活動する環境を整えていただいていることがわかりました。先生は心配になるぐらい遅くまでがんばられています。子どもたちのために何でも協力したいと思います。

【教師を目指す塾生に期待すること】

Bさん

先生は一年目から、若くても他の先生と同じです。先生の判断はとても重いものです。いろいろな角度から子どもたちの思いや悩みを感じ取り、考えられる先生であってほしいです。

また、学校ではいろいろなことが起こり、大変だと思いますが、先生には明るく学校にいてほしいです。子どもたちは、先生の表情、様子から「先生、楽しそう」「先生、嬉しそう」とよく見ています。このことを学校生活において常に感じてほしいです。



Aさん

子どもを大好きになってほしいと思います。そして、熱い思いを持ち、子どもに接してほしいです。一生懸命な姿勢があれば、助けてくれる人も出てきますし、それは、子ども、保護者にも伝わります。

また、PTAでも相談を受けますし、PTAで解決できるものもあります。日頃のコミュニケーションが大事ですので、PTAの役員に積極的に声をかけてほしいです。

最後になりますが、先生から、何気ないことでも、子どものがんばっている様子を伝える言葉をいただくと、保護者としてはとても嬉しいです。

堂上（コーディネーター）

まとめとして、2点お伝えします。一点目、保護者はわが子を通して先生の姿を見えています。保護者との関わり方の中で最も大切なことは、先生が目の前の子どもを一生懸命に育てることです。そのためには日々の授業実践や学校生活を充実させることが大事です。

2点目ですが、子どもの努力に気づくこと・小さな進歩を見つめること、そして、それを褒めることです。ちょっとしたことに気づき、伝えることは、魔法の言葉となり、保護者の信頼につながっていきます。

先生は、子どもに教えることが仕事ではあるけれども、子ども、そして、保護者から多くのことを教わり、成長していくことができる仕事です。

【塾生レポート】 受講して学んだこと

1 全体会

私の親は教職に就いてはいないが、よく自分の親と教育観について話すことがある。けれど、まさに今子育てをされている保護者の方のお話をうかがえるのはとても貴重であった。しかし、その中でもやはり「子どもを大切にしてほしい、いっぱい関わってほしい、寄り添ってほしい」という思いは、自分の親でも今回来ていただいた講師の方にも共通している思いなのだと再認識した。さらに感じたのは、子どもたちを思う気持ちに、保護者と教師の間で熱意の差が生じると、関係が難しくなるのかなということである。一人一人の子どもを保護者とともに育てていく、そういう気持ちで、子どもたちや保護者の方々と接していくことが大切だなと思った。

2 分散会

グループ交流をする中で、本当に保護者の立場になって考えることはできるのかという難しい意見があった。20代そこそこの若者に、人生経験も豊富で、実際に我が子を育ててこられた保護者の気持ちが分かるのかと言われれば口ごもってしまう。確かに「分かる」ことは難しいかもしれない。しかし「受け止める」ことはできると思っている。一人一人の子どもがいるように、保護者の方々にもそれぞれの思いがあるはずである。そこを理解できていれば、一緒に子どもを育てていけるのではないかと感じた。

3 まとめ

子どもを教育する上で、悩んだり考えたりしていることは、教師だけではなく保護

者も同じ思いである。むしろ、その思いは教師よりも深いものであろう。だからこそ、教師もどれだけ「子どもたちに寄り添うこと」ができるのか、どれだけ「子どもたちのために」を貫けるかという熱意を、行動に、言葉に、表す必要があると思う。

コメント

よく考えていますね。教師は、保護者に子育てへのエールを送ることが大事です。その気持ちや熱意は、保護者にも伝わるはずです。教師も保護者も、子ども達の未来を明るく輝くものにするという大人としての責任を持っています。そのことをしっかりと受け止め、大人としてお互いが敬いの心をもって接することが大切なことではないでしょうか。



分散会後のグループアドバイザー打合

京都市教育学講座5（中学校専門講座）

「中学校における学級経営～協働活動の視点から～」

総合教育センター指導主事 内田 隆寿

【学級経営とは】

学級とは、意図的に編成された同年齢の生徒集団です。学校で行われる教育活動の基盤となり、生徒の居場所となるべきところです。生徒は学級で育つと言っても過言ではありません。自分とは違う個性、考え方をを持った同級生と生活することで協力し合い、また喧嘩もしながら人間関係の築き方を学ぶ場です。

学級を経営するとは、単に円滑に進めるだけではなく生徒一人一人の成長発達が円滑かつ確実に進むように、学校経営方針に基づいて、学級を単位として展開される様々な教育活動の成果が上がるよう、諸条件を整備し、手立てを講じて進めていくことです。したがって、一人一人が大切にされる集団作りを目指し、生徒がもつ力を引き出すための関わりを通して、その引き出した力を学校生活の中で活かして進めていく指導が求められます。

本日の副題は「協働活動の視点から」です。そこで「協働」の意味について簡単に整理します。「協働」とは、同じ目的に向かって、それぞれができること、得意分野のことを、共に力と心を合わせて一緒に行うことです。学級という共通の場でそれぞれの個性を大切に協働活動で、自

分たちで自分たちの課題解決を目指す「協働」のイメージを持って学級経営を考えます。

【学級経営 5つの視点】

学級経営の視点は5つあります。

① 目標づくり

学級経営は担任一人の考えだけでは成立しません。生徒一人一人の願いや思い、それから個性が重なり合う協働活動がそれを実現していきます。その拠りどころは学級目標です。学級目標づくりを通して生徒一人一人の願いと教師の願いを融合させて、学級集団として価値観を共有していきます。

学級目標づくりは最初の協働活動です。学級の仲間の願いを出し合いながら学級の総意の下で決定することに意味があります。慌てて作成すると担任の思いが強くなり過ぎたり、学級の中で発言力のある一部の生徒の思いに引っ張られて決まってしまうことになってしまいがちです。どのような学級にしたいか、仲間でありたいのか、話し合いを深め、全員の合意で決定します。

② 組織づくり

学級目標を達成するため、協働活動として学級を動かしていく仕組みとして、学級

内の組織作りが必要です。

一つは生徒が学校生活をする際の基本的な集団としての「班」です。もう一つは「係活動」です。班や係活動は、自分が所属する集団に帰属意識や連帯感を持ち、集団生活や社会生活の向上のために進んで力を尽くそうとする能力を養います。また、その集団の一員としてより良い人間関係を築いていくことができます。

班のことを学校では生活班と言います。学級のスタートは、顔と名前を覚えるために一ヶ月間は出席番号順になるので、班もそれで決まる場合もあります。また、その後の班の編成の方法は、くじ引きも多いのですが、学級編成と同様によりよい教育効果を狙った学級経営を行うためには、班長を決めてから班長会議で班を決める方法をお勧めします。

係活動は一人一役を基本とし、学級の生徒全員が何らかの役割を担って学級に貢献するシステムです。目指す学級像の実現に向けて一人一人が協働していく大切な活動です。一人一役を徹底することは自己有用感を高めることにもつながっていきます。

③ ルールづくり

学級に秩序が保たれ、一人一人が安心して生活し、また、大切にされていると感じるためにはルールは欠かせません。学級経営が「一定の枠の中で生徒により良い手立てをいかに工夫させるか」という営みであることを考えると、担任として絶対にはずすことができない基本的なルールは学級を結成した時に明確に示すことが必要です。これは生徒による学級のルールづくりの土台になります。その後、様々な学級のルールを作ることを進めていく際に、なぜそのルールが必要なのかを生徒たちと話し合うことが大事です。ルールを守る価値がある

ことを担任の経験なども交えながら伝えることで生徒の規範意識や主体性を育みます。

ルールは作った後が大切です。作ったルールが守られているかどうか定期的に確認します。ルールが守られていなければ守られるためにどうするか話し合う必要があります。守られていないルールが存在することは、生徒にルールを守らなくてもいいというメッセージを送っていることになります。

④ 人間関係づくり

学級での他者との信頼や協力関係は生徒の健全な成長と深く関わっています。したがって人間関係づくりには、生徒の学級に対する帰属意識や自己有用感を高めることが大切です。そこで学級経営の人間関係づくりについて2つの側面から見ます。

一つは教師と生徒の関係づくりです。何と言っても一人一人を大切にすること、それから一人一人についての理解を深めることが大切です。そのために生徒の内面に寄り添った共感的・日常的・継続的な見届けはもちろんのこと教科担任・部活の顧問、小学校の担任など様々な立場で関わってこられた教師からの情報、何よりも保護者との対話を通して多面的に生徒を知ることが大切です。また生徒との人間的なふ



れあいを大切に普段からコミュニケーションを欠かさないとことが学級担任として一番大切です。

一方で生徒同士の関係づくりについては、様々な協働活動を通して、認め合い・支え合いを意識して温かい心の交流を促すようにしていきます。具体的には学級の課題解決のために生活班を活用してグループ活動や話し合いの活動を意図的に組み入れていきます。そこで出た生徒からのアイデアを活動の場に適切に生かして評価します。このようにして小さな成功体験をつまませていくことで、生徒の自己有用感を高めていきます。

⑤ 環境づくり

環境が人を作るとよく言われますが、教室環境の整備はそこで学習する生徒の情緒の安定に大きな影響を与えます。整った教室の環境は日々の学習や生活が落ち着き、居心地の良さを感じることにつながります。したがって学校生活の大半を過ごす教室を生徒と共に整備することが学級担任としての大きな役割です。また合わせて言語環境の整備も大切です。まず教師の言葉づかいについては、教師自身が荒っぽい言葉づかいをしていると生徒もそれが許されたかのように雑な言葉が広がっていきます。それによって傷ついていく生徒も出てきます。小学校では子どもを呼ぶときには、大声を上げずに比較的ゆったりと話をされます。小学校の先生はそういうところが言語環境として素晴らしいです。発達段階や生徒指導の違いが小中であるとはいえ、生徒を尊重するような言葉づかいを心がけるようにします。

掲示物は言語環境とも関わってきます。4月に掲示した自己紹介や個人の目標が1年間飾ったままという場合も見かけます

が、掲示物には「旬」があります。私が担任の時は、各生活班に「こういう掲示物を作って」とマーカーと色画用紙などを渡しました。すると生徒たちは協働活動でデザイン力を発揮して工夫して作ってくれました。そうして出来たものを掲示すると、旬も逃さないし、子ども自身の生き生きとした明るい雰囲気が出てきます。一方、掲示物は刺激物になる場合もあります。黒板に集中しやすくするように黒板周りの掲示物は必要最小限に抑える配慮も必要です。

【最後に】

学級経営は決して担任が一人だけで取り組むものではありません。学校の経営方針に基づく学校の目標を達成するために、自分の学級だけで成長しても意味がありません。また、学校が対応すべき課題は多様化・複雑化しています。どの問題も個々の教師の創意工夫だけで解決できるものではありません。

今、必要なのは教師たちの協働に基づくチーム力です。生徒に関わる課題や問題を教師集団で共有して、その課題解決に向けてチームで対応します。もちろん学級の問題に対して前面に立つのは担任ですが、相互に連携を深めて全体が成長していけることが理想です。

イメージは石垣のような組織です。石垣は一見バラバラですが、小さな石と大きな石がバランスをとって何百年も力を分散しながら崩れません。学級、学年、学校も個々の持ち味、強みを組み合わせ、より強い組織になることが求められています。

【塾生レポート】 受講して学んだこと

1 全体会

“協働”という意味を通して、学級では同じ目標に向かってそれぞれができることを協力して行うことは学級づくりにとても大切だと学びました。係活動や日直をもっと大切にして、みんなで学校生活をつくりあげているという集団意識をもてるように工夫したいです。話し合いで班を決めるのは意見をよく言う子どもばかりが得をし、あまり意見を言えない子どもが思ったようにならず平等ではないと思っていました。けれどそういう子どもの意見にも気を配ることやルールを守って決めるならばいいという考えも浮かびました。この方法がだめというのではなく、それぞれどういった目的とするのかを大切にしていこうと思いました。

2 分散会

環境づくりについて話し合いましたが、それぞれの地域、学年、家庭によって方法が違おうと思います。また掲示物も環境づくりのひとつであり、なんでも貼るのではなく適切順にしたり見出しをつくったりするだけで、よりよくなると考えました。段取りや下準備をすることで、たくさんの仕事を要領よくこなせるようになるということも分散会で学びました。中途半端でなく、準備も実行もやりきることが大切なので、心がけようと思いました。学校は知識を学ぶだけでなく、社会のルールを守り、社会人としてふるまうための修学期間だと思えます。専門的な知識を教えることは勿論、目標をもって行動すること、周りの人の関係を大切にすること、組織の一員として動くこと、挨拶や返事など当たり前のことが自

然とできるような子どもを育てていきたいと思いました。

3 まとめ

出来たこと、良かったところは褒め、十分ではなかったところはアドバイスをし、評価をすることも大切にと考えました。目標も掲げるだけではなく、最後には達成できたのか確認もしようと思います。さまざまなアンテナをはり、周りの先生からも工夫などを学んでいきたいです。どんなに忙しくても子ども達一人一人ときちんと向き合う姿勢は譲らないようにしたいです。

コメント

学校教育で基盤となる「学級経営」の大切さに学びの視点をもったのですね。学級や特別活動で子ども達に「どんな力」をつけたいのか、ねらいと見通しをもって展開する力が求められています。個業で出せない力がチーム力によって大きな力を発揮することができます。今後の学びを期待しています。



受付の様子（補講）

京都市教育学講座5（小学校専門講座）

「小学校における学級経営～協働活動の視点から～」

総合教育センター指導主事 谷山 典子

【学級経営に向けてつきたい5つの力】

① 聴く力

学級担任が一番大事にしなければならないことは、聴く力であると考えています。教師を目指す方から、「私は話をするのが苦手ですが大丈夫でしょうか」という相談を受けることがあります。その時、私は、みんなの前で堂々と話す力よりも、まず子どもの声をしっかり聴ける力が必要であると言っています。ここでいう聴く力は耳偏に十の目と心で「聴く」です。子どもの顔をしっかりと目で見て心で聴きます。「あなたのことに集中していますよ」「あなたを大事にしていますよ」というサインになります。このことは人権の尊重に通じます。

例えば、帰り際に、子どもが急いでいたら、「どうして急いでいるの」と聞きます。

すると子どもは「お母さんの誕生日だからプレゼントを買いに行く」と言って帰りました。そして、次の日「どんなプレゼントを買ったの？お母さんは喜んだ？」と聞いたりします。教師が一日覚えていてくれたことに、子どもはとっても嬉しい気持ちになります。

話を聴くことが子どもを大切にする第一歩です。子どもの表情を見ながら聴く、頷きながら聴くなど表情豊かに共感的に聴くことが大事です。

② 言葉の力

次は、言葉の力です。教師の言葉が子どもの言語環境の基盤とも言われています。教師が温かい言葉を使うことで、子どもたちにもその温かい言葉や気持ちが伝わっていきます。正しい言葉のシャワーを浴びせなければならないのです。

例えば、遅刻した子どもに対して、「また遅刻」という言葉ではなく、先に「待ってたよ」という一言があり、それから遅刻の理由を聞きます。机や椅子でガタガタと音を出していることを注意するときに、「がたがたやめてほしいんやけど…」ではいけません。語尾を明確にしてしっかりと注意します。また、子どもの名字に「さん・く



ん」を付けて呼ぶことは「みんな同じ、大切に思っていますよ」という意思表示にもなり、人権尊重の視点として大事なことです。

音楽の授業でリズム打ちが上手にできるようになった子どもに、教師が「どんな練習や工夫をしたの」と尋ねると、子どもは自分なりに考えて話をします。子どもが練習して気づいたこと、発見したことを言葉で表現させることは、体験が言葉を豊かにし、言葉で表現することで体験を充実させることにつながります。

今の気持ち、自分の行動を表現する文章力と語彙力を身に付けることは必要です。教師自身が言語感覚を磨き、日々の学校生活や授業の中で交わす会話を豊かにしていく存在となることを目指してください。

③ よさを見つける力

3つ目は良さを見つける力です。人間の欠点はすぐに目につきますが、良いところはなかなか見つけることができません。欠点を直すことも大事ですが、良さを伸ばすことも大事なことです。

小学生に「友達の良いところを見つけましょう」と言った時、良いところを見つけれない子どもがいます。そういう子どもは自分の良いところも見つけれません。自分の良いところが見つからないということは、自尊感情が育たない、自己有用感が感じられないことにつながっていきます。

学級経営では、子どもの良いところを具体的に認め合い、お互いを高め合う環境をつくるのが大事です。お互いに認め合える雰囲気が教室に充滿すると、たとえ自分の考えに対して批判的な意見が出て受け止めることができます。より良くするためのアドバイスであると捉えることができます。そして、「自分ができたことを友達にも



伝えよう」]「友達の良いところも吸収していこう」「自分ができないことは友達にアドバイスをもらおう」という協働的な学びにもつながっていきます。

協働的な学びでは、仲間と協力し、問題を解決するために、自分の思いや考えを相手に伝えます。そして、仲間の意見や考えを比べながら聴き、共通点や相違点を見つけ出します。一人ではできないことを仲間と協力することを通して、互いの考えを深化、発展させる学びへつなげます。

教師はよく聴き、多くの言葉を蓄え、良さを見つける力を付けることが求められています。そして、ここでも人権の尊重が大事になってきます。子どもたち一人一人をしっかりと見つめ大切にします。人権は空気のような存在です。お互いの人権を尊重し合うより良い空気があると気持ちのいいものです。これらにより、みんなで高め合っていこうとする学級集団ができていくわけです。

④ 規範意識の向上

4つ目に付けたい力は当たり前のことを当たり前にする規範意識の向上です。教師から見れば「当たり前」と思えることが、子どもにとってはそのように思えないこともあります。まず教師が子どもにルールやマナーの意味をしっかりと教えます。

例えば、挨拶は年上の人からするものでも年下の人からするものでもなく、自然に挨拶をします。子どもに「時間を守りなさい」と言うのであれば、教師も授業の開始時刻、終了時刻を守ります。子どもに「宿題を期日までにやりなさい」と言うのであれば、教師も提出期限を守ります。言葉遣いは、怒っているときも乱暴になることなく、心を落ち着けて、丁寧にしていきます。

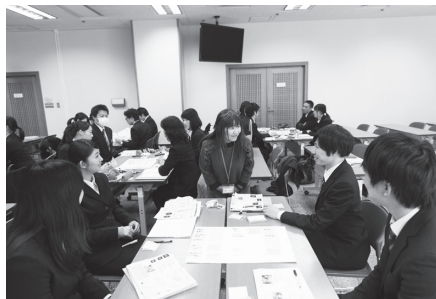
教師が身だしなみとして、見た目を整えることも大事なことです。始業式や終業式では、式に相応しい服装で臨み厳肅な雰囲気を感じ取らせ、子どもたちに場に応じた服装があることを教えます。教師自身が手本を示し、子どもに考えさせ、気づかせます。

⑤ 健康で明るい心

5つ目は健康で明るい心を挙げます。私も学級担任の時は上手いかなかったことが多くありました。子どもには申し訳ないのですが、良いと思い実践したけれども、失敗だったこともいくつかあります。苦しく、辛い時ですが、必ず周りにいる教職員が応援してくれます。同僚や先輩の教職員に支えられながら、教師を続けていくことができたと言っています。健康で明るい心をもってください。どんなことも乗り越えていくことができます。

【最後に】

子どもが発する声だけではなく、子どもが書いた文章や作品、何気ない表情や行動も気にとめ、見つめ、真摯に耳を傾けて聴き、心を開いてしっかりと受け止めることができる教師になってください。そして、教育に携わるものとして向上心と学び続ける姿勢を持ち続けていただきたいと思います。



【塾生レポート】 受講して学んだこと

1 全体会

お話の中にあつた「付けたい力」という言葉にもうひとつの意味を感じた。子どもにとって親の次に身近ともいえる教師の立ち振る舞いは、子どもの手本になっていることは疑う余地もない。となると、今教師が付けたい力というのはそのまま子どもに付けさせたい力でもあるのだと思う。教師が率先して身に付け、行動で示すということになるのではないか。

2 分散会

分散会ではこれを踏まえて更に「子ども同士で聴き合うこと、よさを見つけ合うこと」という話が展開された。教師から子どもに「良い伝染」をして伝わった力を、子ども同士で、クラス全体で醸成し、よりよいものにしていくこと、それこそまさに「協働的」な活動ではないかと協議を通して感じた。「聴く」ということの多様性にも話は及んだ。戸惑いや葛藤を抱えながら、勇気を出して「先生」と話しかけてくる子どもに、真っ直ぐ向き合い、話を聴くことや、その前の段階で、話しかけやすい雰囲気を作っておくこと、表面だけでなく心の中に秘めた思いまで引き出し語らせる力、全て含めて「聴く」ことであり、一番大事なことではないかと納得できた。

3 まとめ

「先生はちゃんと私のことを見てくれている。話を聞いてくれる。だから大好きだ」そうクラス全員が思えば、理想的だ。簡単でなくても、まず教師が愛をもって接すること、だからこそ褒めるし叱るのだということが伝われば、子どもたちは一層やる

気をもって取り組むようになるだろう。先生のことだけでなくクラスメイトのことも好きになれるはずだ。これもまた協働活動に資する点は大きいと思う。付ける力の背景に子どもへの思い、愛をもっておきたいと感じた。



コメント

学級には学ぶ集団、生活する集団、活動する集団としての組織的性格があります。愛情に満ちた観察眼で、各集団の視点で子どもたちを見つめていると、どの子にも個々において素晴らしい才能や長所をもっています。子どもたちと担任がこれらを共有し、それぞれのいい点を認め合えるクラスにすることが学級経営の根幹をなす部分ではないでしょうか。

京都市教育学講座 6 (小学校専門講座)

模擬授業「子どもと創り出す社会科学習」

教員養成支援室指導主事 栗栖 ゆみ子

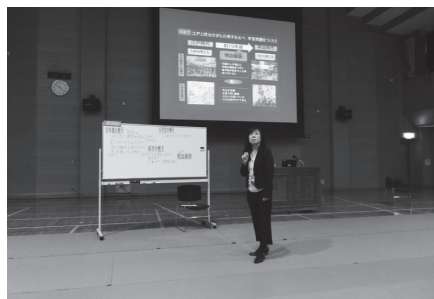
- 学年・教科 6年 社会科
- 単元名 日本の歴史 ～町人の文化と新しい学問～（全6時間中の1時間目）
- 単元目標 歌舞伎や浮世絵、国学や蘭学について資料を活用して調べ、社会の安定に伴い、歌舞伎や浮世絵などの文化が町人の間に広がったことや、国学や蘭学などの新しい学問が起こったことについて考え、表現する。
- ※ 模擬授業前に、小学校社会科で育てる能力等について講義
- ※ 塾生は全員が小学6年生の児童として模擬授業を受講

【塾生レポート】 受講して学んだこと

1 全体会

社会科の模擬授業を通して「子どもと創り出す」授業について学びや気づきを得ることができました。「子どもと創り出す」ためには、子どもが主体的に学ぶことのできる授業づくりが重要で、「考える時間」や、明確なめあての設定等が必要であると、先生のお話から分かりました。それに加え、思考力・判断力・表現力を付けること、言語活動の充実、単元全体を通した流れ、また中学校での学習とのつながりも大切であることにも気が付きました。模擬授業には様々な工夫がされており、とても楽しく充実した1時間でした。みんなで学習問題をつくるという授業の中で、江戸時代の文化

や学問に関して、学習を深めていくことのできる資料が複数用いられており、子どもたちの興味関心を引くことができると感じました。またゴッホの作品という単元の内容とは一見結びつかないような教材から授



業を始めることも工夫の一つでありおもしろいと感じました。また自分の意見を考える時間や発表する時間が多く、言語活動が充実していたと思います。これは子どもたちに充実感を与えているように感じました。授業のつくり方だけでなく、先生の言動にも学ぶことが多くあり、子どもたちが自分の意見を持ち、発表しやすい言葉かけや雰囲気づくりをされていたように思います。

2 分散会

「子どもたちと創り上げる授業」をするために必要だと思うことについて意見交流をしました。多くの視点から授業をつくっていくことが必要であるといった意見が出ました。私はその中で、子どもたちが「学べた」と実感することができる授業をつくる必要があると思いました。そのためには、子どもたち一人一人が授業に参加し、自分の意見を持ち、授業のめあてを達成することができるような工夫がいると思います。見やすい板書や効果的な資料の用意、教師の言葉かけ、目的が明確な学習活動といった授業の工夫だけでなく学級の雰囲気作りやルールの設定等、学級経営も影響していることが分かりました。

3 まとめ

これまでは「授業をする」ということに意識がいてしまい、学びが深まる、子どもたちが「楽しい」「学べた」と思うことのできる授業ができていなかったように思います。子どもの目線に立って自身の授業を振り返り創り上げていくことが必要であるので、様々な視点から自分自身をみるとともに、授業をする上で必要な技術を身に付けて行こうと思いました。



コメント

素直な学びが感じられます。素直に学ぶことが一番です。子どものために一生懸命になろうとするあなたの姿勢がとてもよいです。教師は子どもの主体性をいかに引き出すか、意欲をどのように高めていくかなど苦心します。今日の模擬授業での学習問題のつくり方や発問の仕方を参考に子どもと共に創り出す授業に挑戦してください。

京都市教育学講座6（中学校専門講座）

模擬授業「生きる力を育む道徳教育」

総合教育センター指導主事 中大路 浩一

- 学年・教科等 3年 道徳の時間
- 主 題 名 崇高な生き方
- 資 料 名 カーテンの向こう
- ね ら い 人間の弱さ醜さを自覚しつつも、それを乗り越えて自分に恥じない誇りある生き方を見だし、よりよく生きようとする道徳的心情を培う。
- ※ 模擬授業前に「道徳教育の重要性」「道徳の教科化」、模擬授業後に「道徳の時間の工夫」について講義
- ※ 塾生は全員が中学3年生の生徒として模擬授業を受講

【塾生レポート】 受講して学んだこと

1 全体会

いじめや自殺、リストカットなど「道徳」が重要視されていることは広く知られている。でも一言に「道徳」と言っても何を示しているのか上手く説明できるかは正直自信がなかった。講座の中で、道徳とは「人として真っ直ぐに歩く能力をつけること」「正しい判断基準（ものさし）は人それぞれで、それを教えること」と学んだ。この言葉を聞いたとき、少し漠然としていた道徳が明確化できたように思った。そして教師側から「～すべきだ」と説教や大人の常識を押し付けずに、子どもから引き出していく大切さも学んだ。私が中学生の頃、自分の意見が言えなかった経験を思い出しながら、

「着ぐるみ」を着る効果を考えることができた。





2 分散会

評価方法の背景として、教師が発達段階に適した声かけや授業方法をとることの大切さを話し合った。小学生では受け入れられることも中学生では受け入れられないこともあるだろう。どのように工夫したら「印象に残る」授業ができるのか、チャレンジしたい点でもあり、同時に不安なところもなった。他のグループから出た「内申を上げようとして受け入れる生徒がいるかもしれない」という意見を聞いて、より評価の難しさを考えることができた分散会だった。

3 まとめ

全てを通して、まず教師自身が道徳の本質を身に付けるべきだと知り、家にある「心のノート」を復習するところから始めようと思った。そして、子どもたちが発信する言葉やコメントから、教師の意図が伝わったか評価できるように、細かな心情を読み取れるようになりたいと考える。

コメント

学級担任になれば週1時間は必ず道徳の授業を行わなければなりません。道徳の授業は道徳の時間を要として、学校の教育活動全体を通じて行うこととなっています。学年で持ちまわりや学年道徳、また全校道徳といった特設の道徳の時間を設ける学校も増えてきています。そのようなときに、養護教諭として道徳の授業を行うことも想定しておかなければなりません。また保健室に来る子どもと接する中でも、道徳的心情や判断基準、実践意欲や態度などの道徳性を養うことも可能かと思えます。

教育実践特別公開講座4

「総合育成支援教育を考える ～学びのユニバーサル・デザインを通して～」

総合育成支援課指導主事 石原 廣保

【講師からのメッセージ】

「支援の必要な子ども」への支援を考えて行く際、「個別の支援」に目が行きがちです。しかし、その前提となる「落ちついた環境」「全体指導の充実」が大切です。どのように環境を整えて行けば良いのか？全体指導をする際のポイントは何か？「学びのユニバーサル・デザイン」の考え方を知った上で、学校での支援について考えていきましょう。

【はじめに】

次の事例を考えてください。

- 体育の服を裏返しで着ている子がいた。
- 担任の先生が気づいて「裏返しだよ」と注意した。その子どもは「はい」と答えた。
- しかし、しばらくしてその子どもを見るとまだ体育の服が裏返しのままだった。
- 再度、やや厳しめに注意した。
- 5分後、その子どもを見ると、まだ裏返しのままだった。担任は厳しい口調で「何度言ったらわかるんだ。早く表向きにしろ」と注意した。
- するとその子どもはパニックになり、

しばらく泣きじゃくっておさまらなかった。

さて、ここで問題です。

- なぜその子どもは体育の服を裏返しに着ていたのでしょうか。
- なぜその子どもは2回も注意されたのに、裏返しのままだったのでしょうか。
- なぜその子どもはパニックになってしまったのでしょうか。

実際にあった事例です。この子どもは触覚過敏でした。体育の服は分厚くて縫い目が大きいです。縫い目と後ろのタグがチクチクします。これが嫌で大好きな体育を楽しむできませんでした。思いついて裏返しで着たが、それを知らないまわりの大人は



注意します。何回も注意されて困ってしまい、パニックになりました。

この話で伝えたいことは、「子どものアセスメントが大切だ」ということです。アセスメントは実態把握ともいえます。情報を収集し、日常の様子をよく観察する事が大切です。そうするとこの子どもの場合、触覚過敏ではないかと考え、「もしかしてチクチクしているのかな」「裏向きに着た方がやりやすいの？」と優しく聞くことができたかもしれません。

【ユニバーサル・デザイン】

今からユニバーサル・デザインの話をするのですが、「子どものアセスメントは大切だ」という前提は変わりません。目の前の子どもはどうなのかという視点を忘れないようにしてください。ユニバーサル・デザイン、略してUDと言いますが、手法ではなく考え方であることを覚えてください。

京都市では、「環境整備」「全体指導」「個別の支援」の3つを合わせてユニバーサル・デザインだと考えています。「発達障害のある子どもにとって参加しやすい学校、わかりやすい授業は、すべての子どもにとっても参加しやすい学校であり、わかりやすい授業だ」ということです。

ユニバーサル・デザインは、まず地域環境が大事です。当然、学校環境も大事にな



ります。教室だけ環境が整っていても学校が整っていなければ落ち着きません。次に学級環境の整備です。その次に初めて指導です。したがって、いきなり指導方法だけをユニバーサル・デザインにしてもそれは前提になる部分を飛ばしていることとなります。そして、UD化した授業をしても難しい場合に個別の支援をします。

UD学会がつくった授業のUD化モデルには、まず「参加」があって、そのあとに「理解」があります。そして、身につける「習得」があって日常生活など応用で使う「活用」があります。最初に「参加」がなければ何も始まりません。「まず参加を増やしましょう」というのがユニバーサル・デザインの考え方です。「参加」しているだけで単に楽しかったらいいというわけではありません。教科の目当てを達成できるようにすることが「理解」の部分に当たります。その後の「習得」「活用」はユニバーサル・デザインの学習だけでは難しく、身に付けるためには、反復学習等の様々な学習を取り入れていく必要があります。

【シンプル・スタイル・シェア】

授業のユニバーサル・デザインにおいて、大切な要素が3つあります。1つ目が「焦点化」です。目標や活動を絞って内容理解から論点が深まるようにします。2つ目が「視覚化・身体化」です。視覚・動作を入り口にして考えられるようにしていきます。3つ目が「共有化」です。一人の考えを他の子どもたちに伝えて自分の理解や思考を深めるようにします。「焦点化」「視覚化・身体化」「共有化」の3つが大事な柱になります。京都市では「シンプル」「スタイル」「シェア」と言っています。

その中でも、一番大事なのは「焦点化」と

言われています。まず目標を「焦点化」します。次に、発問・活動・評価も「焦点化」します。「目標の焦点化」は、真直ぐに目当てが達成できるような活動を仕組んでいくことです。「発問の焦点化」は、目当てにあった発問をシンプルに考えます。「活動も焦点化」します。授業で一番の目当てが達成できる活動を取り入れていきます。同じトーンで話し続けるのではなく、「わーっ」と盛り上がる授業の山場の部分を作ることでも大切です。「評価の焦点化」は、その時間で子どもが、何ができればその時間の目当てを達成できたかということ具体的に決めておくことです。ここで大事なことは、子どもの表現で考えることです。子どもがどのような言葉を言えば、また、どのような言葉をワークシートに書けば目当てを達成していることにするのか、具体的に考えます。全員の評価ができる方法を考えましょう。できるかぎりまとめの部分で評価していきます。

次に「視覚化」です。聴覚に頼りすぎて言語だけで進んでいる授業では、視覚優位の子どもはどうしてもついてこれられません。あるいは聴覚だけでは記憶が保てない子どもは、前のことを忘れてしまい、なかなか活動と結び付けられません。そこで、視覚的なものを取り入れていきます。さらに、見えないものを「見える化」します。時間や感情などは目に見えません。それを視覚化していきます。色なども効果的に使うように考え、目に見えないものを見るようにしていくことが視覚化です。焦点化にも有効です。パッと見て「今日はここが大事だ」とわかるように使ってほしいです。

そして、「共有化」です。「問題意識を共有する」「考えを共有する」「自分の考えに



自信を持つ」など、参加行動を増すための取り組みです。具体的にはペア学習や小グループ学習を取り入れていきます。

例えば、ある子どもの発言を途中で止めて続きを考えさせます。先生の発問に対する答えを最後まで言わせず、「はい。A君の答えの続きは何だと思う」とB君に聞いてみたり、ペア学習で考えてもらったりします。「クラス全体でA君の考えをみんなで考えよう」ということをします。長い時間ずっと考えるだけではなく、選択肢を与えて「正解は①と②どっちだと思う。①だと思う人はその理由を教えてください。②だと思う人は②だと思う理由を教えてください」のように言います。理由が言えない子どもは①か②かだけ言えるし、理由が言える子どもはそこでたくさん説明ができます。短時間で繰り返すことにより全員の参加行動が増えていきます。

【まとめ】

「シンプル」「スタイル」「シェア」この3つを授業の中でいつも意識しながら考えていくことがユニバーサル・デザインの考え方です。たくさん本が出版されており、事例も載っています。ただ、これは授業中の指導方法だけのハウツーになるので、目の前の子どものアセスメントをしたうえで取り入れないと「本に載っていて面白そう



DVD 視聴の様子

だから使おう」というのは順番が逆になります。ある子どもに「ここをわからせたい」と思って本を見たらヒントがあったので、「これは使えそうだ」という流れでないといけません。ハウツーを取り入れる際に、順番を逆にすると自分がハウツーをこなすことで満足してしまい、目の前の子どもを置き去りにしてしまいます。

当然、個別の支援が必要な子がいます。いくらユニバーサル・デザインの考え方をしても、それについてこられない子どもがいるので個別の支援をしていきます。しかし、個別の支援ばかりに走ると、1時間の授業の中で支援がいきなりません。「A君はこんな課題があってB君は…C君は…」といていたら時間が足りなくなります。授業がわからなければ、ざわざわ騒ぎ出したり、ごそごそして学級自体落ち着かなくなったりします。ユニバーサル・デザインの考え方によりなるべく多くの子どもたちを授業の中に参加させます。それでも理解が難しい子どもがいた場合、その子どもに個別の支援をしていきます。ユニバーサル・デザインは、個別の支援をする時間も作り出すことができます。個別の支援としてはいろいろあります。例としては、【ルビを振る】【事前にその子どもだけ音読の練習を先生としておく】【九九の表を手元に持たせておく】などを個別にしておきま

す。全体では必要なくA君だけ必要であると思ったら、A君にだけ用意することが個別の支援です。

繰り返しになりますが、授業のユニバーサル・デザインにおいては3つ大事なものがあります。「シンプル」「スタイル」「シェア」です。授業の前に環境整備が大事です。全体指導の後に個別の支援も大事です。「環境整備」「全体指導」「個別の支援」がセットで初めて「学びのユニバーサル・デザイン」になります。

最後に、もう一度言います。最も大事なことは、目の前の子どもの適切なアセスメントです。これがあってこそすべてがつながります。